

眞の学力とは何かを問うことから

障害児の学力観について

関 祐二

〇はじめに

長野県ではここ二、三年、マスコミを含めた「学力」についての議論が、さまざまな角度から高まっている。

学力問題の発端は、県内高校生の「有名大学への進学率の低下」が明らかになったからである。私は、教育の成果を「有名大学への進学率」で評価することにこそ問題があると考えているので、「本質はそこにはない」と思っているが、現代社会において、有名大学への進学率が高いことは、その県の教育の高さ(?)を示す一つの基準となっていることも否定できない。これはいわゆる能力主義的な考え方である。一流企業に入るために一流

大学をめざす風潮がいまだに存在する。一流企業に入っても「幸福な生活」が保障されるわけではないことがわかりかけているけれど。

また、戦後その目標につき進んできたためにもたらされた校内暴力、いじめ、差別などの教育荒廃や、思春期やせ症、不登校などの病理学的現象が大きな社会問題として指摘されるようになって、「学力」についていろいろな反省もされている。

そしてこの「学力」についての議論は、養護学校にもさまざまな影響を与えている。

できるだけ早い時期にいろいろな知識や技能を身につ

けることが大切で、そのために教科的な学習を訓練的に取り入れてほしいと要望する親たち。知識・技能をたくさん身につけることが「学力」になると考え、養護学校は普通学校の教科を簡単にしてわかりやすく教える場所であるといろいろな教育技術や法則を取り入れている先生たち。それらの声を聞くたびに、子どもたちの心の問題はどこへ行ってしまったのか、真の学力とはいったい何かを考えざるをえない。

○生き方や人生にかかわる力

私の中では漠然とだが、真の学力は量ではかるものではなく、質でとらえられるものだという考えがあった。つまり、試験などの点数で量的にはかれない、一人一人の人間の生き方や人生を支える質的なものであるという考え方である。

この考え方の方向性を確かなものにしたのは、昭和六十三年に内地留学して学んだお茶の水女子大学附属幼稚園の実践や、実習生として参加した愛育養護学校の実践

に出会ったからである。

昨年七月、久しぶりに訪れた本田和子先生の研究室で、長野県の「学力問題」について言及したところ、本田先生より「障害児教育にとっての学力観とは何か問うてみる必要がありますね」とタイムリーな課題を与えられた。またそのあと訪れた愛育養護学校では、津守真先生より、「養護学校の中で生活か教科かという対立関係だけで議論することは不毛です」と指摘され、いろいろな観点から「真の学力」に迫ってみる必要性を教えられた。

私はこの二年間、県の学力向上調査研究委員会の特殊学校部会に参加してきたが、調査の結果、障害児教育に携わる多くの先生方が、みな同じような問題に悩んでいる実状を知った。出された意見を集約してみると、つぎのような点があげられる。

一、「学力」を「自立する力」ととらえた上で、その考え方、見方の共通理解が教師間でなかなか深められな

い。

二、「自立する力」を子どもの動きや実体から見るときに、どんな観点でとらえられるのか、その方法が明確でない。

三、障害の重度、重複化に伴い、その多様性、発達の相違、個人差に応じた指導の内容をどのように具体化できるのか。（とかく部、学年など全体で学習活動をすすめる傾向が強く、個々の教育課題を明確にして取り組むことが少ない。）

四、教科を中心に下学年対応で学習をすすめようとする考え方と、生活に即して身近な題材を見つけて学習しようとする考え方の相違がある。

五、子どもの心をとらえる教師の目や感性を高めるために、専門的な研修が要求される。

六、学校で育てたい力と家庭や社会から要請される力のあいだに大きな差がある。

七、子どもの実態に合わせた教材・教具の工夫が必要であるが、創作のための予算、時間、設備などに制約が

ある。

以上七点くらいにまとめられたが、障害児の学力についてさまざまな問題や考え方があることがわかった。

そこで、私の体験や実践から障害児の学力について今、考えていることを述べてみたい。本稿では一人の知恵遅れの児童（S男）と私との関わりを中心に考察してみた。

○S男の生き方を支える力

S男は小学部に入學し、この三月で二年が経った。入學したときは教室の隅にいてまわりをうかがっている感じだったが、しだいに活動的になり、今ではすっかり自分を出して友だちとの関わりも広がっている。

このS男が入學したころを思い出すと、あのときのS男の生き方を支えた「真の学力」が見えてくるようで、いつまでも印象に残っている。

私はS男との出会いをつぎのような記録にとっ

る。

記録①

*

入学式の日、父母から離れられなくて、「(一) わいよ、(二) わいよ」と泣く。母親から、「はじめての場所、はじめての人とはすぐに慣れません、だんだん慣れてくると元気になります」と言われた。新しい世界や人に対し、不安や恐れを感じているらしく、目をキョロキョロさせながら母親の手をしっかりと握っている。母親が、「この先生がS男の先生だよ」というと私の目をちらっと見る。私はこのS男が気になり、入学式がはじまるまでのあいだ近くいてみようと思う。母から離れて私の方に来てくれるだろうか、泣かないでステージに登れるだろうかなど頭をかすめた。父母が近くにいたこともあり、しばらくしてそばにあった絵本を見つければ、ペラペラとめくりながら、興味をもった絵を見て、私の目を見ては何か言おうとしている。そのときS男と気持ちがつながったような感じがした。「これはどうなんだね、これはうさぎさんだね」と答えると、

つぎつぎに絵を指さしていく。入学式を告げる放送があつて、「S君いこうか」と私が手を差し出すと、父母の方を見る。どうするかと思つて待っていると、S男の方から手をつないでくる。私はうれしくなつてS男の手を少し強く握りしめた。体育館に近づいたが、父母と離れなければならぬので、S男はしきりに父母の方を見たくてふりかえる。そのたびに私の手を握る力が強くなる。入学式がはじまつて表情も体も硬くなつてきたが、泣くこともなくステージに上がり緊張のうちに入学式を終わる。教室にもどつて父母の顔を見るとすぐに行つて母親の手を握っている。

はじめての給食を自分から何ひとつ食べようとしなかつた。新しい状況を受け入れられないときは、食べ物も入らないのだろう。

この記録を読んでもみると、S男の新しい世界や状況に対する不安や恐れが感じとれる。と同時に、S男を気にしている私自身の不安も読みとることができると、こんな

ときは、未知の世界の中で、自分が小さくなっていくような感覚を子どもは抱いてしまうのかもしれない。それを支えてくれる人の存在があったから何とか自分を保っていられたのだろう。

*

記録②（数日後）

S男はプレールームの片隅にすわりこんで小さなボールをいじっている。ほかの子たちはすべり台やブランコなどで活発に遊んでいる。S男が隅にすわってつまらなそうにしているので近くに行って一緒に遊んでみようと思っただ。

壁にお化けの絵がはってあったので、「おばけやつつけてやる」と言っって私がボールを投げつけると、それに興味をもったらしく、膝を立てて見ている。それからお化けの方を指さしてボールを投げるまねをする。私はもっとボールをぶつけてほしいと要求していると思いきりかえすと、S男が立って私のそばまで来る。とうとう自分からボールを拾ってお化けにぶつける遊びを喜んではじめた。

私はあとでこのときのことをふりかえり、S男のいた位置と身体の動きに注目し、S男の気持ちの動きをはつきりと感じとることができた。プレールームの隅ですわっている↓膝を立てて見ている↓立って私の傍まで来る。これらの動きの中に、S男の意欲的な主体性が読みとれる。

この日から私が食べ物を口にもっていくと自分から食べるようになった。

*

記録③（さらに数日後）

プレールームのなだらかな坂を私とほかの子どもたちが



ミニカーに乗って下りて遊んでいると、しばらく見ていて、自分からあいているミニカーを見つけて乗った。それまでは誘っても乗らなかったのに、楽しそうに遊んでいる雰囲気を感じとって、やってみようと思ったのではない。しかし自分から坂を下りようとはしない。ミニカーに乗って友だちや先生が下りてくるのをバチバチと手を叩いて喜んで見ている。「S君もやってみようか」と坂の上から私が誘ってもいやいやをしている。ミニカーにまたがっているだけで満足しているようだ。

この記録を読んでもみると、ずっと私のそばにいたS男が、だんだん新しい状況に自分から挑んでいこうとする芽が感じられる。しかし坂を下りて遊ぶことには躊躇しているS男がいて、自分なりの判断で拒否することもある。

○内面の主体性を培う力

S男の記録と考察をもとに、はじめに述べた「質的な

学力」について整理してみたい。

質的な学力とは、子どもの内面の主体性を培う力だと考える。自分が自分らしく生き、自分で自分の人生を展開していく力だとも言える。その主体性を培う力を、もう少しわけて四つの観点からみると、つぎのようになるのではないか。

- ① 情緒を安定していく力
- ② 意欲を形成していく力
- ③ 状況や関係を理解・判断していく力
- ④ 知識・技能を生かしていく力

ただし、これらの力は、バラバラに働くものではなく、相互に関わり合い、現実を生かされていく力である。またこれらの力が子どもひとりひとりに醸成されるまでのプロセスを大切にしたい。つまり「になる力」「になりつつある力」に育つ過程を通してはじめて獲得される力となるだろう。

これら四つの観点からもう少し考察を加えてみると、記録①において、新しい世界に不安や恐れを感じている

S男が、母の手をしっかりと握っているところで、その手と手のあいだに二人の深い心の結びつきを感じとることが出来る。またはじめて出会った私にも安心した気持ちを抱き、信頼感を寄せてきている。こういう人を信頼する力は①の情緒を安定する力に入るのである。安定できるところをたよりに、新しい状況や困難を受け入れ、乗りこえていく力にもなっていく。

記録②において、ボールに興味に向いているS男に何らかの関わりが持てないかと積極的な気持ち私が私の中にあって、S男の要求に応えながら関わっていくうちに、S男自らがボールを使って遊ぶ姿に変容している。これは、S男の意欲があらわれ、形成されていく過程と考えられる。

記録③において、楽しい雰囲気を感じとり、その状況に自分から身をおくことを選んでいともいえる。しかし、坂の上から下りるには、さまざまな状況と状況の関係、人と人との関係から判断して「自分にはまだ無理」と思ったであろう拒否という意志を表現している。そし

てミニカーにまたがっている「今」に満足している。このような人と人とのあいだやこととこととのあいだの関係を理解し判断する力がS男にはついてきていたのである。

○内的な体験を通して

以上、一人の知恵遅れの児童を事例として取り上げ、現在私が考えている「真の学力」について述べてきたが、このような学力は子どもの生活に根ざした内的な体験を通して培われるものであろう。しかし、能力主義といえる社会の中の学校で、このような内的体験を大切にしたい授業実践をしようとするとかかなりの勇氣と思いきりと覚悟がある。それははじめに述べたさまざまな考え方や価値観があるからである。

しかし、今こそ、本質を求め、真の学力を模索しながら実践していく以外に、子どもたちの内的な主体性を育てる道はないのではないか。子どもの質的な学力に価値を求める人が増えていくことを願う。そうすれば、はじ

めにあげたいいくつかの問題点も解決の糸口が見つかるであらう。

私は日々の学校生活の中で、子どもの内的主体性を育てるために、つぎのことを心がけようと努力している。

○ 子どもと自分との関係の上で、子どもの心と自分の心とのやりとりを打診しながら展開していく。体と体との触れ合いの中で、心と心の深いところに届くような触れ合いを大切にしていく。

○ 子どもに教えようとする授業ではなく、子どもといっしょに学ぼうとする授業をつくる。

○ できるとかできないとか結果を重んずるのではなく、いかにその子らしくやろうとしているか、生き生きとしているか、その過程を大事にする。

○ 授業記録をとり、それをもとに職員チームが互いに理解し、価値観を尊重し合う関係をつくっていく。

○おわりに

子ども一人一人の内面の主体性を支える教育こそ価値

がある。そういえるために改めて真の学力の意味を問う必要がある。また目に見えない子どもの内面とのふれあいや対話から生まれる本質的な問いを吟味することからはじめていきたい。

だれもが皆人間として生命的な力にあふれていることに価値を見出せるようなものの方や考え方をしていきたい。

(長野養護学校)

〈参考文献〉

○ 津守真先生のすべての著作。実践から語られる先生の言葉には示唆に富むことが多く、何度読んでも深く新たな視座を与えられる。津守理論ともよばれる展開をここで再び勉強させていただいた。

○ そのほか『学校生活の中での子どものととな』(岩崎禎子先生『教育と医学』慶応通信 一九九二、十二月号)、『生活をつくる子どもたち』(飯島婦佐子先生『フレール館』を参考にした)。